The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『ボヴァリー夫人』における<<pyramide>>と<<papillons>>について
Author(s)	戸田, 幹夫
Citation	Gallia. 1990, 29, p. 11-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11930
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

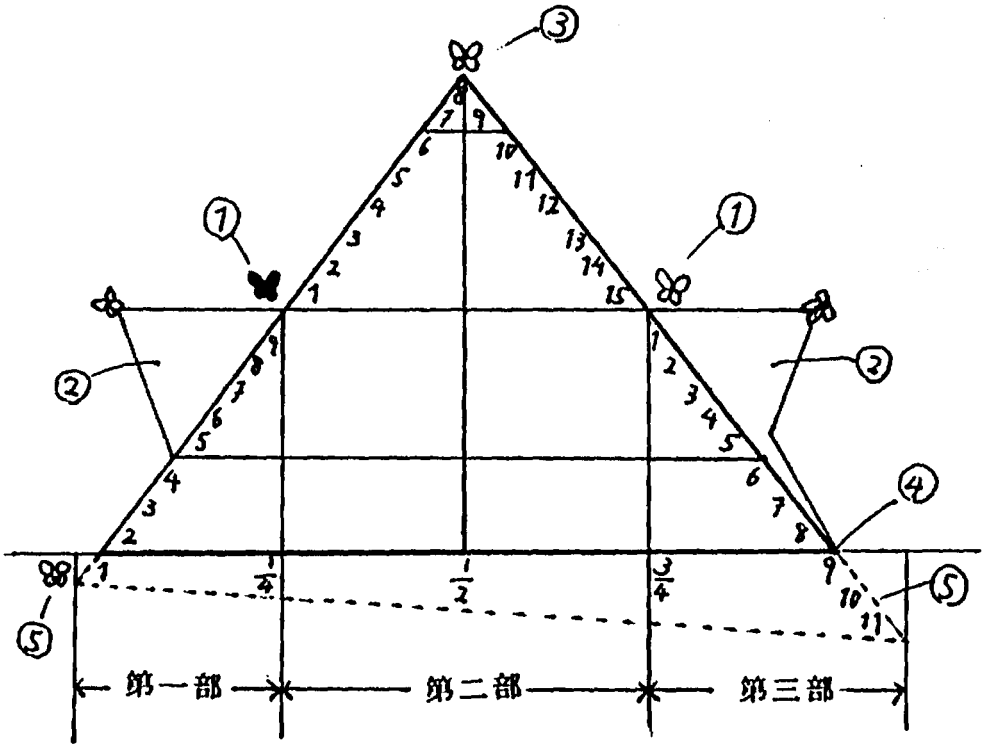
The University of Osaka

『ボヴァリー夫人』における《pyramide》と《papillons》について

戸　田　幹　夫

たとえば《Quelles pyramides à remuer, pour moi, qu'un livre de 500 pages !》(1852年12月29日付ルイーズ・コレ宛書簡。Pléiade 版 Correspondance II, p. 224) と，『ボヴァリー夫人』の作者は書いている。『ボヴァリー夫人』にとってピラミッドとはどういうことか，今日まで発見されていなかった。

作品中の《papillons》という単語がピラミッドの謎解きをすることを，これから述べよう。だが，本論に入る前にピラミッドの見取図を示しておきたい。



この三角形は真横から見たピラミッドのつもりだ。¼の左がこの作品の第一部，¼から¾が第二部，¾の右が第三部である。斜辺のすぐ下にある数字はそれぞれの部の章の番号である。蝶の形をしたものは，飾りではなくて，《papillons》の位置を示している。①～⑤は，本論の1～5でそれぞれ扱う，ということである。

* * *

1

第一部9章最後の文章（¼）と第三部1章最後の文章（¾）が照応する。

¼ Un jour qu'en prévision de son départ elle faisait des rangements dans un tiroir, elle se piqua les doigts à quelque chose. C'était un fil de fer de son bouquet de mariage. Les boutons d'oranger étaient jaunes de poussière, et les rubans de satin, à liséré d'argent, s'éffiloquaient par le bord. Elle le jeta dans le feu. Il s'enflamma plus vite qu'une paille sèche. Puis ce fut comme un buisson rouge sur les cendres, et qui se rongeait lentement. Elle le regarda brûler. Les petites baies de carton éclataient, les fils d'archal se tordaient, le galon se fondait ; et les corolles de papier, racornies, se balançant le long de la plaque comme des papillons (noirs,) enfin (s'envolèrent) par la cheminée.

Quand on partit de Tostes, (au mois de mars,) (Madame Bovary) était (enceinte.) (p. 70. ページ数は Garnier-Flammarion 版による)

¾ Une fois, au milieu du jour, en pleine campagne, au moment où le soleil dardait le plus fort contre les vieilles lanternes argentées, une main nue passa sous les petits rideaux de toile jaune et jeta des déchirures de papier, qui se dispersèrent au vent et (s'abattirent) plus loin, comme des papillons (blancs,) sur un champ de trèfles rouges tout en fleur.

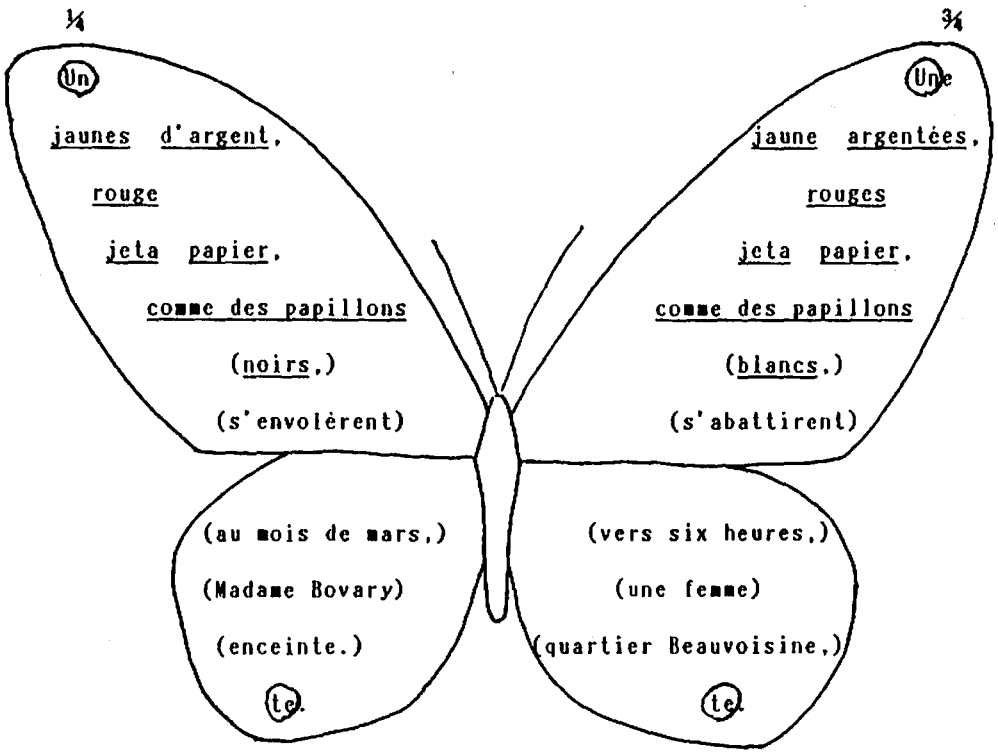
Puis, (vers six heures,) la voiture s'arrêta dans une ruelle du (quartier Beauvoisine,) et (une femme) en descendit qui marchait le voile baissé, sans détourner la tête. (pp. 250－251)

この2つの文章の中に，共通のものと対照をなすものがある。Quartier papillon という蝶の羽の上にそれらを対称的に並べてみた。左の羽は¼の文章，右の羽は¾の文章，上の羽はそれぞれの第1パラグラフ，下の羽はそれぞれの第2パラグラフである。

それぞれの文章のはじめとおわりのアルファベ2字を見ると，どちらともUNではじまりTEでおわっている。

共通のものには，アンダーラインを引いておいた。

Quartier papillon



一重線は，キーカラーとでもいうべきものである。黄と銀と赤が同じで，蝶の色が各々黒と白になっている。蝶の色が対照をなしているのは，エンマの気持ちが対照をなしているからであろう。¼では，エンマにふさぎの虫がつきまっくらな気分になっている。結婚の花束を燃やしてしまったくらい。¾では，有頂天になったエンマがまっしろな気分になっている。恋人のレオンと二人で馬車に乗って走っている野で。

二重線は，《jeta》《papier》《comme des papillons》の3つに引かれている。紙が投げられ蝶になる，という構造が，両者に共通している。この背景には，『聖アントワーヌの誘惑』が投げられて『ボヴァリー夫人』になった，といういきさつがあるかもしれないし，ないかもしれない。

対照をなすものには，丸括弧をつけておいた。

両者の第1パラグラフの中では，《comme des papillons》に関係する動詞の意味が対照をなす。すなわち，¼の《s'envolèrent》と¾の《s'abattirent》。ところで，½の蝶たちに関係する動詞は《se soulevèrent》であるから，¼と½と¾の3点において蝶たちに関係する動詞たちは，直説法単純過去複数三人称形で共通点をもち，運動力学的意味で対照的な関係に置かれる。

対照をなすものは，第2パラグラフに身を寄せ合っている。

まず，¼における「3月」は1年のうちの¼，¾における「6時ごろ」は1日のうちの¾である。

それから，Emma の呼び名が違う。《Madame Bovary》/《une femme》が，貞淑な人妻/姦通の女という意味を，対照的に強めている。

最後に，¼の《enceinte》と¾の《quartier Beauvoisine》は，二重の意味をもつ駄洒落であるという共通点を，対照的に示している。

《enceinte》という語の，妊娠している，という意味はここで，追い込められている，という残酷な意味を，孕んでいる。

《quartier Beauvoisine》という語に，ボーヴォワジーヌ地区という地名を映すと，¼と¾のきれいな照応が向う側に見える。きれいな，というのは，蝶の羽のように，ということでもあっただろうか。

2

第一部5章最初の文章。

> La façade de briques était juste à l'alignement de la rue, ou de la route plutôt. Derrière la porte se trouvaient accrochés un manteau à petit collet, une bride, une casquette de cuir noir, et, dans un coin, à terre, une paire de houseaux encore couverts de boue sèche. A droite était la salle, c'est-à-dire l'appartement où l'on mangeait et où l'on se tenait. Un papier jaune-serin, relevé dans le haut par une guirlande de fleurs pâles, tremblait tout entier sur sa toile mal tendue, des rideaux de calicot blanc, bordés d'un galon rouge, s'entre-croisaient le long des fenêtres, et sur l'étroit chambranle de la cheminée resplendissait une pendule à tête d'Hippocrate, entre deux flambeaux d'argent plaqué, sous des globes de forme ovale. (pp. 32－33)

この文章の中に使われている色彩と第一部9章最後の文章（¼）に使われている色彩が照応する。ここでは，黄と銀と赤と白と黒の5色が，すべて揃っている。この5色をキーカラーとすると，¼では白が欠け，¾では黒が欠けている，ということになる。

また，第一部5章はじめ（p. 34）に出てくる Héloïse の結婚の花束と¼の Emma の結婚の花束が照応する（Héloïse という名前は，母音の e の次が l，Emma という名前は，母音の e の次が m で，l の後は m である）。

このようにして，キーカラーと結婚の花束によって両端を押えられている第一部5章から9章までは，シャルルとエンマがトストに到着しヨンヴィルに引越するまでのトストの生活期間にあたっている。しかし，実際のトストの生活が描かれているのは，5章と7章と9章であり，6章ではエンマの修道院時代の回想，8章ではヴォビエサールの舞踏会という1回きりの楽しい出来事が描かれている。

《Tostes》という地名は，反復される子音のｔとｓが，退屈な夫シャルルとの穏やかだけれど単調な生活に対してエンマの舌と歯が鳴らす不満気な無声音であり，母音のｏとｅの２つが，その繰り返しの中に挿入された響きのあるもの，声帯を震わせながらエンマの咽喉から口外へ吐き気のようにして出てくる手のような本音である（《Yonville》という地名は，場所の副詞ｙと不定代名詞onと町のvilleから成る。どこにでもあり誰でもが住むありきたりの平凡な町であれば，繰り返しから逃れようとするエンマはどこに引越しても破滅するのだろう)。

第一部の５章と７章と９章が単調な繰り返しのトスト，６章と８章が夢を見ていたルーアンの修道院と夢だったようなヴォビエサールであるなら，その裏返しに，第三部の１章と３章と５章がレオンと二人きりのロマンティックなルーアン，２章と４章が退屈なヨンヴィルとなる。そこで，前者をトストの中ピラミッド，後者をルーアンの中ピラミッドと呼ぶことにしたい。

２つの中ピラミッドの真ん中の章（第一部７章（p. 41）と第三部３章（p. 261））のそれぞれの最初の文において，《lune de miel》という語が共通している。この語は，小説中，この２箇所だけである。

第一部７章のなかばに現われる《les papillons jaunes》(p. 46) がトストの中ピラミッドの頂点，第三部３章のなかばに現われる《un ruban de soie ponceau》(p. 263) がルーアンの中ピラミッドの頂点といえるだろう。

黄色い蝶たちは，結婚生活に対するエンマの離叛を，真っ赤な絹のリボンは，ロドルフに捨てられレオンに拾われたエンマの恋の炎を，暗示するかもしれない。

3

第二部８章，ヨンヴィルの大広場で農事共進会審査委員長 Derozerays 氏の表彰名簿読み上げの最中，村役場の二階で……

½ Rodolphe lui serrait la main, et il la sentait toute chaude et frémissante comme une tourterelle captive qui veut reprendre sa volée ; mais, soit qu'elle essayât de la dégager ou bien qu'elle répondît à cette pression, elle fit un mouvement des doigts ; il s'écria :

— Oh ! merci ! Vous ne me repoussez pas ! Vous êtes bonne ! vous comprenez que je suis à vous ! Laissez que je vous voie, que je vous contemple !

Un coup de vent qui arriva par les fenêtres fronça le tapis de la table, et, sur la Place, en bas, tous les grands bonnets des paysannes se soulevèrent, *comme des ailes de papillons blancs qui s'agitent* (p. 154. イタリックは筆者)

蝶たちが風に羽打つパラグラフは，ＵＮではじまり，終わりはＴＥＮＴだが，発音上はＴＥと同じである。この点で，¼と½と¾の蝶たちが一致する。

ここで強調したいのは蝶たちの「羽」だ。これは『ボヴァリー夫人』という小説の構成上の頂点であり，この羽こそは左右対称性を暗示しているのだ。また，羽というailesは彼女というelleでもありelleとはこの小説のタイトルのMadame Bovaryだ，と言ってみたいところだが，たぶん偶然であろう。

風は，白い蝶たちに，頂上の，薔薇園で（de roseraie），吹いた。

第二部の左右対称の例。

２章のはじめでボヴァリー夫妻はヨンヴィルに到着し（p. 81），14章の終わりでヨンヴィルを出発する（p. 226）。

４章のなかば過ぎでエンマはレオンに絨緞を（p. 102），12章のなかば前でロドルフに鞭やら何やらを（p. 195），プレゼントする。

６章のはじめで，エンマは「四月」の風景に心和らぎ，修道院での生活を思い出し，レオンを恋しているという魂の悩みをブールニジアン神父に告白しようと教会に行く（pp. 112－113）。10章の終わりで，エンマは「四月」の日差しのなかで，ルオー爺さんの手紙を読みながらベルトーの農場生活を回想し，穏やかな気持ちになって，ロドルフとの姦通を後悔し始める（pp. 175－178）。

７章で，ロドルフはある百姓男の血を採ってもらいにボヴァリー家にやってくる（pp. 130－133）。９章で，エンマはロドルフに血を採ってもらった（p. 165）。

4

第一部２章最後でエロイーズが突然死ぬ。そして，左右対称の位置にある第三部８章最後でエンマが死ぬ。「なんというおどろき」（p. 21）。

Souvent la chaleur d'un beau jour
Fait rêver fillette à l'amour.
Pour amasser diligemment
Les épis que la faux moissonne,
Ma Nanette va s'inclinant
Vers le sillons qui nous les donne.
Il souffla bien fort ce jour-là,
Et le jupon court s'envola !

この歌は，小説の中で，2度歌われていた。1度目は第三部5章のなかごろ（p.273）で，最初の2行だけ書かれている。2度目は第三部8章最後のエンマの臨終の場面（pp.332－333）で，この時は最後まで歌われている。

第三部5章で乞食の歌が歌われたのはキーカラーの代りなのである。キーカラーは第一部の5章と9章，そして第三部1章に配置されていたが，第三部5章にはない。トストの中ピラミッドはキーカラーで閉じられていたためにエンマは外に出ることができた（といっても，同じような町のヨンヴィルにだが）。それに比べ，ルーアンの中ピラミッドは，一方の端でキーカラーの代りに乞食の歌が配置され，エンマがそこから（死へ）抜け出せるのは，もう1度，乞食の歌が現われて歌を完結させる時となる。

歌の文句の一番最後の単語の《s'envola》は，¼でエンマが暖炉に投げ捨てた結婚の花束が黒い蝶たちのように揺らめいて煙突から飛び去った《s'envolèrent》ことを思い出させる。また，乞食の歌で飛び去った短いペチコートは，第一部2章から4章，第三部6章から8章が形作る台形に似ている。

第三部8章，結婚生活8年目に，8千フランの借金に追われて，砒素を飲んで死ぬ間際にいるエンマが，《L'aveugle》と罵倒した乞食の歌は，8音節8行からできている。

ところで，エンマがはじめて小説中に登場する第一部2章から¼の蝶たちの第一部9章まで，第二部のはじめから8章の½の蝶たちの羽まで，その羽から第二部の終わり（15章）まで，¾の蝶たちの第三部1章からエンマが死ぬ8章まで，この4つの8章ずつから成る四半分がピラミッドを造ることになるのだが，ここで，1章分を水平方向に1，垂直方向に1と考えたい。すると，前半の前半が登り斜面で水平方向に8，垂直方向に8，前半の後半が登り斜面で水平方向に8，垂直方向に8，後半の前半が下り斜面で水平方向に8，垂直方向に8，後半の後半が下り斜面で水平方向に8，垂直方向に8，ということになる（頂上の第二部8章を，水平方向に2，垂直方向に1とする）

そこで，乞食の歌の中のボワンやヴィルギュルのうち方とレイアウトに注意してほしい。2行目にボワン，そして地の文が3行目との間にはいる。これが第一部の終わりである（8音節×2であるから，水平方向に8，垂直方向に8，登るのである）。4行目にヴィルギュル，これが½の頂上である（同様にして頂上まで登り続けて）。6行目にボワン，そして地の文が7行目との間にはいる。これが第二部の終わりである（今度は降りるのである）。7行目にあるヴィルギュルは，第三部を5章の乞食の歌で前半と後半に分けたものだろう（降り続けて）。8行目のボワンデクスクラマシオンでエンマが死ぬ（これでピラミッドが終わる）。

乞食の歌はエンマの人生の要約的罵倒であり，エンマの人生の描かれる第一部2章から第三部8章までのピラミッドはエンマの墓なのである。

そして，8は，蜂ではなく，蝶に似ている。

5

エンマが死んだ後，シャルルは悲しみの闇の中に入る。第一部１章であらわれた《les papillons de nuit》(p. 9) の nuit は悲しみの闇夜ということかもしれない。その他の papillons はすべて paillons de jour で，蝶のようにはねるエンマを象徴していたのに比べると，この papillons de nuit はシャルルを象徴しているだろう。蛾はろうそくの回りを飛び回っていたのだが，ろうそくは，シャルルの心を照らしていたエンマということになるだろうか。

第三部11章，エンマの墓についてのオメーの助言。

> Il eut de belles idées à propos du tombeau d'Emma. Il proposa d'abord un tronçon de colonne avec une draperie, ensuite une pyramide, puis un temple de Vesta, une manière de rotonde... ou bien《un amas de ruines》. Et, dans tous les plans, Homais ne démordait point du saule pleureur, qu'il considérait comme *le symbole obligé de la tristesse*. (p. 352. イタリックは筆者)

第一部２章から第三部８章までがエンマの墓であるなら，あまりの章たちは泣いている柳だ。小説全体ーピラミッド＝第一部１章，第三部９章，10章，11章は，「悲しみの象徴としてどうしても必要なもの」なのである。

第一部１章だけに登場する《nous》は，悲しみの象徴としての泣いている章たち，すなわち，nous ＝ je ＋ eux とすれば，je が第一部１章，eux が第三部９章，10章，11章である（１人章，３人章というしゃれのつもりはない）。

第一部が１章，第三部が３章，余計に書かれていることについては，一と１，三と３を合わせたということも考えられる。

＊　＊　＊

乞食の歌やオメーの助言のように，この小説の構成の要約的説明ともなるものについての補足。

第一部１章のシャルルの帽子（p. 4）。たとえば，なかほどの「赤い線に仕切られている，ビロードと兎の毛交互の菱形模様」は，２つの中ピラミッドにおいてエンマの幸不幸が交互に組み合わさっていることをほのめかしはしないだろうか。第三部１章の白い蝶たちに呼応するかのように「白鳥」という語が，第一部の６章（p. 40）と８章（p. 55），第三部の５章（p. 270）の三箇所だけに現われているし，ヨンヴィルとルーアンの中継点は「赤十字旅館」なのであるが。

第一部4章のウェディングケーキ（p.30)。たとえば，てっぺんの「本物の薔薇のつぼみ」は，頂上の薔薇園と照応するようである。

第二部4章のトランプとドミノ遊びの順序（p.101)。「31」《trente et un》→「エカルテ」《écarté》→「6・6」《double-six》→「3回の百点勝負」《trois centaines》。ピラミッドの図と照合してほしい。

章の番号に意味があることについての補足。

第二部8章の農事共進会は8月なかばに行なわれ（p.159に「6週間たった」とあり，p.162に「10月の初旬である」と書かれていることからわかる)，第二部13章の13が書かれた後でロドルフは裏切りの手紙を書きはじめ（p.205)，12章で,「夜の12時」(p.204)，エンマはロドルフに，明日の「昼の12時」(p.205）にプロヴァンス旅館で，という馬車に乗って駆け落ちする約束を確かめさせるが，第三部1章で，1時にレオンと馬車に乗り（p.243に「大聖堂で11時に」という約束があり，p.248に「2時間近く」大聖堂の中にひきとめられているという記述がある)，3章で周知のように3日間の蜜月を過ごし（p.261)，5章で，ルーアンでレオンと毎木曜日に遊んだけれども（木曜日 jeu-di は遊びの日，1週の第5番目の日)，6章では，レオンと二人きりのロマンティックなルーアンもおしまいとなり，愛の破綻を感じるエンマは，昔そこで暮した修道院の楡の木陰のベンチに座ったり，仮装舞踏会に出かけたりするが，6章は《Tostes》の6文字の構造の再現として，6つに分けられ，o の位置に修道院（pp.289－290)，e の位置に舞踏会（pp.297－298）のエピソードが入り，ともに「4時」で終わっていて，t の位置に逃げていく愛のこと，s の位置に攻めてくる金のこと，と大摑みできるのだが，同様にして7章は7つに分けられ，アラン，レオン，オメー，乞食，ギョーマン，ビネー，ロレーの7人が順繰りにエンマに自分の疎外感を深めさせ，8章で8人目のロドルフに追い払われ，蝶のようなエンマが蝶(8)たちに埋もれて死ぬのは，「運命の罪です」(p.355)。